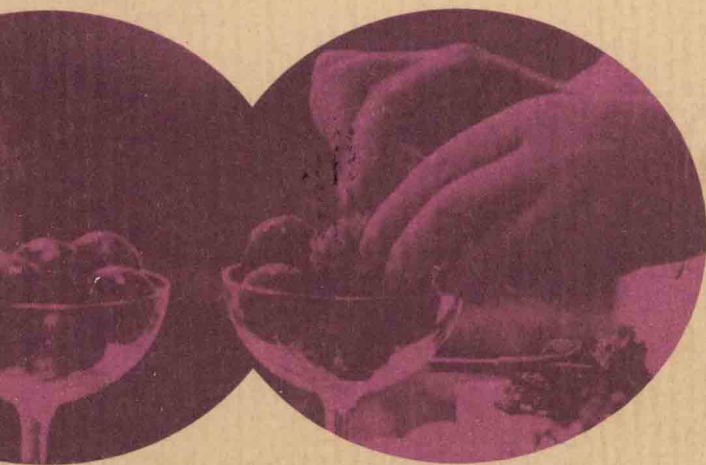


妻たちの 思秋期

●藍子は、恥ずかしい夫との性の関係を思いきって言うてしまおう……と心に決めたのだろうか。いたた口火を切ると、自分の意識の水面下にある性の感覚をたくり寄せるように、淡々と話していく。「セックスって、やはり男と女の両方の喜びじゃなきゃ、おかしいでしょう？ それが、あの人の自分の欲求がたまってきたから出するんだ、体を貸せ、という感じなんです。ところがどんな気持ちでいるか、そんなことぜんぜんお構いなし……。それがくり返されていくと、だんだん私はあの人にとつて欲望を排泄する道具にすぎないんだなあ、とても惨めになうてくるんです」……………



妻たちの思秋期

昭和五十七年十二月十五日第一刷発行

昭和五十八年三月四日第十刷発行

●編著者

斎藤茂男

●装幀者

杉浦康平＋鈴木一誌

●撮影者

児玉房子

●発行人

森野朔郎

●発行所

株式会社共同通信社

東京都港区赤坂一―九―二〇 第十六興和ビル 郵便番号 110-7

電話 〇三―五八六―〇一五二 振替東京六―六七―

●印刷所

大日本印刷株式会社＋福音印刷株式会社

●定価

1100円

乱丁・落丁本は郵送料小社負担にておとりかえします。

1965 ISBN 4-7647-019-X Coo36 ©Shigeo Saito 1982

斎藤茂男さんとうしげお

一九二八年、東京に生まれる。

一九五二年から共同通信記者。

一九五八年、警察による謀略事件

「省生事件」の報道で取材班の一員

として第一回日本ジャーナリスト

会議(JCJ)賞受賞。

一九七四年、連載記事「ああ繁栄」

でふたたびJCJ賞受賞。

著書――

『わが亡きあとに洪水はきたれ!』

(現代史出版会)

『悪家族 おおハッピーライフ!』

『飛び立ちかねつ島にしあらねば』

(晩聲社)

『教育ってなんだ(上・下)』

『父上母よ! (上・下)』

『事実が私を鍛える』

(太郎次郎社)

『会社とは――Kゼミ24人の軌跡』

(日本経済新聞社)

妻たちの思秋期「ルポルタージュ」日本の幸福——斎藤茂男『編著』

まえがき

ここに収録したルポルタージュは、都市中流家庭の中高年の妻たちを主な登場人物にして、彼女たちの心の状況を、現代社会とのかかわりのなかでとらえようとしたものである。

前半は、最近増えつつあるアルコール依存症(中毒)の主婦六人を主役に、サラリーマンの夫が企業人間として上昇階段を昇ることに専念し、妻の心を振り向こうとしないことへの寂しき、不満、あるいは漠とした「生きること」への目標喪失感などから、しだいにその心の空白をまぎらそうとしてアルコールにおぼれこんでいく、その軌跡を追ったものだ。

後半は「妻が夫を捨てるとき」という表題の通り、企業の中間管理職として安定した地位にあるような夫に、自分から離婚を宣告して別れていく中年まっ盛りの妻たち四人が主役である。彼女たちはなぜ、経済的に何ひとつ不自由なく、外からは幸福そうに見える家庭を振り捨ててまで別れていくのか、その揺れ動きながら新しい生を求める精神内面の様相を描こうとしたものだ。

もともと私は、このような「妻たち」を取材対象にしたルポルタージュを書くつもりではな

かった。はじめは、国際的にも国内的にも激しく戦われている経済戦争の第一線にあって、疾走をつづけるホワイトカラーの「男たち」を主な対象にしたルポルタージュを書こうと意図していた。彼らの仕事の内容や人間管理の仕組み、人間としての悩みや生き方などを手がかりにして、企業の裏側から日本という経済強国の裸の姿を描きたいと考えていたのである。

世の中、低成長時代と聞いていたのに、実際はそれどころか激烈な競争に明け暮れる企業内部の実態や、そのなかで心理バニックを起こし、神経症患者として入院生活を送る人たちなどを取材して歩いた。ところがそのうちに、私の視線はそういう「男たち」の背後にいる「女たち」に強く引きつけられるようになった。夫が企業という戦場へ出撃していく基地のようになった家庭の内部、その妻の胸のなかに、私が追求しようとしていたものの確かな投影があるのではないか、「女たち」の側から見ると、より鮮明に私のねらう標的はくつきり姿を現わしてくるのではないか——そう考えるようになったのだ。

こうした経過で、サラリーマン家庭の妻たちを中心とする「女たち」に照準を合わせて、取材をやりなおした。その結果がここに収録したルポルタージュであるわけだが、「女の側から状況を見る」というこの方向転換は、私に思いがけない開眼をさせることになった。

私が働いているような報道機関には取材課題としていつも「女性問題」が掲げられているし、男性記者としての私の問題意識にも、それは当然のことのように掲げられていた。だが私は「女性問題」を視野に入れていながらも、それは女性自身の問題であり、女性たちにとっ

ては重大なこともかもしれないが、政治・経済の第一級の重要課題とされるテーマに比べれば次元が低く、それほど緊急性はなく、そもそも社会全体のあり方に直接深くかわる問題であるとも思われない——という漠然とした先入観に、かなり支配されていたのも事実のように思う。かくして女たちの声は、周辺の私的なうつぶんの声はむろんのこと、声高に叫ばれる公的な声にしても、男性記者である私にとってはわずらわしく、適当に「記憶に留める」程度の対応になりがちだったことを、認めないわけにいかない。

だが「妻たち」を取材していくにつれて、多くの女性がいま意識しはじめ、声に出しはじめているその訴えの内実は、女性だけの利害にかかわる問題ではなく、男性をふくむ私たちこの時代に生きるすべての人間にとって、人間らしく生きるとはどういうことなのか、人間らしく生きられる社会とはどういうものなのか——といった根源的な問いを投げかけているように思われてきた。つまりコトは女だけの問題なのではなく、男の問題でもある——という至極単純なことなのだが、恥ずかしいことに、私にとっては一つ大きく視界が開けてきたぞ……という実感の伴うできごとだった。

どうやら女たちは、男が疑うことなく営々と構築作業に精を出しているこの現代資本主義社会の、そのありように対して、夫という存在を通して本能的ともいえるような感性で疑問を感じとり、心と体のナマ身の表現で男たちに何かを呼びかけはじめている——この取材を通じて私はそのことを感じとった。その意味で、この報告は女のひとばかりでなく、男性諸氏にもぜひ読んでみてほしいと願っている。

なおこの本は一九八二年春から夏にかけて共同通信社が加盟新聞に配信し、全国三十八紙に掲載された連載記事『日本の幸福』の第一部（妻たちの思秋期）と第二部（妻が夫を捨てるとき）をまとめたものである。

新聞では、これまであまりセックスの生態をま正面からとりあげてこなかったが、夫婦関係に立ち入るこの取材では、セックスを避けては通れない。私にとっては初体験のことだが、記事のなかに「妻たち」の性をめぐる体験告白をありのまま書いた。その性の問題をはじめ、夫婦関係にまつわる微妙な心理の絡みあいについては、精神科医、心理学者、カウンセラー、セラピストなど臨床経験豊富な専門家たちに、私たちの取材では光の届かない陰の部分を照らしだす作業してもらった。自分の秘密の領域にまで立ち入ることを許し、快く取材に応じてくれた主役たちと、それらの専門家のお力添えがなければ、この本は生まれなかったろう。

全体を通して取材は共同通信社会部の中豪、池田信雄両記者と私の三人で担当した。『日本の幸福』は現在まだ続編が書き継がれており、第三部「老いの道・女の道」では、長寿王国の裏側で深刻化しそうなボケ老人の問題をとりあげ、老人介護と女としての人生の狭間で苦悩する妻たちの姿を追っている。

一九八二年十一月

斎藤茂男

目次

●まへがき……………Ⅱ

〔Ⅰ〕妻たちの思秋期……………Ⅲ

●無言劇……………Ⅳ

寂しくて、悲しくて…… 海辺の精神病院へ
死んだ子らへの思慕 眠れぬ夜が引きガネに
希薄な夫婦関係のなかで 寂しかった幼女時代
仮面かぶって幸せ芝居 ひたすら夫を待ちつづけて
疾走する夫の職場 孤島暮らしに憧れる
無欠勤の果てに自滅 追いつめられる五十男
女子行員との駆け落ちも 働きバチの論理は
私の人生って何？

●主婦のブルース……………56

“倦怠期”の男たち 優雅な駐在員夫人の裏側

魔の六時がやってくる 二十五年もほうつといて！

生みの母に見捨てられ 嫁の恨みつらみ内攻

密閉されてあえぐ こんど飲んだら離婚だ

夫は辺地の建設現場へ 母親べつたりの“よい子”

役割喪失のそのとき…… 肉体の語りかけがほしい

主婦なんてつまらない

●紫色の情景……………102

女は男の道具なのか 古い意識が足カセに

酷寒の大陸で結ばれる 老いの身の愛哀し

●X先生との対話……………114

いまを真剣に生きるとき 妻たちのむなしさを代償に

●読者の投稿から……………120

“ぜいたくな悩み”なのか 必死の模索さまたまに

エネルギーの受け皿どこに

〔Ⅱ〕妻が夫を捨てるとき……………128

●黒河……………130

失恋の寂しさから急速に 新妻に冷ややかな風
上流意識露骨な夫の実家 親離れしない幼児なのか
肉親の心理力学のなかで 身勝手な冷たさに泣く
氷のような拒否感覚 荒涼とした性の関係
性に表現されるエゴイズム 異境で孤独感深まる
夫を置いて帰国の途へ 破綻の原因は何か
見せかけの価値に幻惑され 愛なしには生きられない

●凍える家……………169

夫は疾走する企業戦士 彼女から手を引いてくれ
急坂を転げるように 思いやり薄い夫の肉親
上昇志向強い夫の母親 息子の就職に駆けまわる
実直で優しい父親を蔑視 情緒を育てるとは？
あなたの態度が許せない 果てしない性の荒野
底なしの寂しさのなかで 心の空洞隠すモーレツ人間
離婚も母親に気がねして

●霧の中で……………214

街に渦巻く愛情凶絵 好きな人がいるんです……

夫の哀願振りきって 両親不仲の家庭に育つ

恋愛なんて低俗なもの…… 駐在員生活で見えてきたもの

忍従の母に育てられ…… 盛んな企業活動の裏側で

性関係なく過ぎる女盛り 離婚は生きなおすステップ

●X先生との対話……………242

結婚の条件は男女の自立 繁栄社会を支えるもの

渦巻く人間らしさへの願ひ

●読者の投稿から……………252

厨に立てば街の灯の見ゆ 根強く残る良妻賢歌

より深くより広く人間らしく

●取材ノート……………260

ゆがみの影を漂わせて ある管理職の戦死

いたずら電話を待つ私…… 私、社長に直訴したいんです

オモチャの新幹線のように 寒天のようにぶよぶよで……

●あとがき……………276

妻たちの思秋期「ルポルタージュ」日本の幸福



I 妻たちの思秋期

成長神話はとうに幻に消えたはずなのに、日本の企業社会には競争と管理の歯車が依然音を立てて回転しているとみえる。その渦に巻きこまれ、心理ハックに陥って医師の門をたくさうリーマンがいつこうに滅りそうもない。その一方では

「身も心も会社にささげ尽くしたカスのような夫と、これからの長い余生を暮らしたくない」と夫の定年退職を待つて離婚していく妻たちの話を、近ごろよく耳にする。と、そんな世相断片をつなげてみるだけでも、どうやらいま、人々の胸に漠とした不安、倦怠、喪失、閉塞といった感情が去来しているように

思われてくる。ちようと冬の薄暮の時のように、この時代が蒼く染まりはじめているのか、これまで

追い求めてきたものはほんとうの「幸福」だったのかという問いのまえに、だれもが立ち止まっているようだ。

ことし、日本がソ連をも抜いてGNP(国民総生産)全世界二位の脅威の国になろうというとき、私たちにとって「幸福」とは――。



無言劇

寂しくて、悲しくて……

●胸騒ぎ

北陸地方のA市で、大手都市銀行の支店長をしていた北見栄一(仮名)と妻の菊江(仮名)は、銀行が社宅に借りあげた家賃十二万円の高級マンションに住んでいた。菊江の娘時代からの友人で、夫が同じ銀行に勤める多加子(仮名)が、菊江からの不審な電話に胸騒ぎがして、東京からA市へ駆けつけたのは二年まえの春のことだ。

菊江は以前から、夫の勤務先の地方都市から多加子によく電話をかけてきていた。月に一度ぐらいお互いの消息を伝えあっていたところは、多加子も異常を感じなかったのだが、菊江が鹿児島へ移ってからは、そのころ山形に住んでいた多加子のところへ十日に一度、そのうちに週一度になり、ときには一日に二回もかけてくるようになった。

「あたし寂しいの、あんたどうしてるう? と、涙声でしきりに寂しいと訴えるようになりましてね。だめじゃない、頑張らなくちゃ、外に出なさいよ少し……と言ってみるんですけど、だんだん落ちこみが激しくなる気配で……」

●自殺願望

夫の転勤で菊江がA市に移ってからは、その声の調子に病的な異様さが感じられるようになった。昼間から電話口でシクシク泣きじゃくり「わたし悲しくて……だめなのようもう……」などときくり返す。

「しきりに遊びにきてちょうだいって言うもんですから、主人の出張の機会を利用して訪ねることにしたんです。ところがいざ何日に着くから……と連絡すると、こんどは来ないで。お願いだからわたしを見ないで……」と泣くんです。そのうちに「死んじゃおか」とか「あたし死んじゃうから……」と独りごとのようにつぶやく声がまじりはじめましてね」

死という声を聞いたとき、多加子はハッとした。以前、菊江が住んでいた銀行の社宅で、一軒置いた隣の奥さんが首つり自殺をしたことがあった。そのとき、ひどく衝撃を受けた菊江の顔と、受話器の向こうの顔が二重写しになった。まさか本気で……いや、もしかすると……と菊江のつぶやきを反芻するうち、多加子は急に心配でいたたまれなくなった。共通の友人で、夫が同じ銀行に勤める綾子(仮名)に連絡をとった。京都に住む綾子と途中駅で合流して、雪の街を菊江のマンションに駆けつけたのは翌日の午後。

●異臭のなかで

部屋のなかにはカーテンをすべて閉めきり、まっ暗だった。菊江は十五畳ほどのリビングルームのまんなか布団を敷きつばなしにし、ネグリジェ姿で布団にうすくまっている。夫は出張中だという。

布団のそばには電話、吸いがらがあふれた灰皿、脱ぎつばなしの洋服に下着、ちり紙などがゴチャゴチャに散らかっている。酒のにおいの混じった酸っぱい異臭が鼻をつく。子ど